
エンゼルランプ

佐井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンゼルランプ

【Nコード】

N7551F

【作者名】

佐井

【あらすじ】

想い人を待ち続ける少女、少女の幸せを願う少年、幼い兄妹の物語 「もう一度会いたい。それだけだよ」「そばにいてやることは出来ないけど、幸せになって欲しいんだ。」「今度はオレがあなたを助けるんだ」「あーあ、早く大人になりたいなあ」

第1話 1

これはまだ夜が明けたばかりの時だった。ここ卯月山ウツキヤマにも東の方から明るい太陽の光が差し込み、肌寒い空気の中に何となく温かさを感じさせてくれた。そんな中、木々の合間を縫うように流れる細い川のほとりを、年はまだ幼い少年と少女が川の流れに逆らうように緩やかな坂道を登っていた。

卯月山はそれほどの高さも無く、道も綺麗なのである程度の準備さえしておけば誰でも超えていけるような山だった。おまけに環境が良いらしく、この山ではいろんな種類の植物が育つので、多くの旅人や商人達が頻繁に卯月山を越えていくのだ。

「お兄ちゃん、もう疲れたー」

「もう少ししたら休憩するから頑張れ」

少し先を歩く悠吏ユウリは足を止めて妹の茉吏マツリが自分に追いついてくるのを待つ。まだ幼く身体も小さいマツリにとってはさすがにいきなりの山越えは厳しいのかもしれない。

ユウリはマツリがトボトボと頼りない足を動かすのに見かね、持っていた荷物を一旦降ろすとマツリに背中を向けるようにしてしゃがんだ。

「ほら背中乗れよ、そん変わり荷物持つてて」

「…それは良い。兄ちゃんが疲れるでしょ」

「オマエにトロトロ歩かれるよりは全然マシ」

「……ゴメンナサイ」

「嘘だよバーカ。ほら、さっさと乗りな」

そうやってユウリがからかうように笑うと、マツリはコクンと小さく頷いて兄の背中に乗った。そしてすっかり背中に乗った妹に荷物を握らせて、兄は力強く歩き出したのだった。

ユウリとしては出来れば1日のうちに山を越えてしまいたいと思っていた。そうでなければ野宿になってしまうからだ。

自分だけなら良いのだけど、出来れば妹にはそんなことをさせたくなかった。だからまだ夜が明ける前から出発してここまで来たのだった。

しかし、いくら華奢な女の子とはいえ1人の人間と荷物を背負っての山道となればさすがのユウリにもかなりキツイ。あれから数十分を1人で歩き続けると息も切れ切れになり体力的にも落ちてきている。そろそろ休憩しようかと、足を止めそつと視線を背中の方に向ければマツリはいつの間にかスヤスヤと眠りについていた。そのあどけない寝顔に何故かホッとして、顔の力が抜けるのを感じた。

「（もう少しだけ、先に行ってから休もう）」

マツリを起こさないようにソツとその身体を背負い直して、再び歩みをはじめた

…と、そのとき。

ユウリはある事に気が付いた。

「…なんだアレ」

視界の端に映ったのは、変わり栄えのしない木々達の隙間をもくもくと立ち上る白い煙。視線をそのまま下に降ろしていくと、そこに見えたのは…どうやら家のようだった。

「…にーちゃん、」

「マツ、ちよつと起きて」

「んー…、どーかしたのお」

「家がある。誰か住んでんのかも」

ユウリ背中で寝ぼけたようにモゾモゾと身動きする妹の意識がはつきりと覚醒してくれるのを待ってやる。

するとマツリは自分でスルスルとユウリの背中から滑り降りていった。背中が軽くなったユウリはマツリから荷物を受け取る。

「どうするの？」

「…んー…」

「ねえお兄ちゃん、行ってみない？」

「もし変な奴だったらどーすんだよ」

「良い人だったら休ませてくれるかもしれないじゃない」

「けどこんな山奥に住んでるなんて変だろ」

「…変な人だったら、逃げる」

「……今度は背負ってやんねーからな」

「がんばる」

「よし」

キュツとユウリの旅衣タシロヘを掴んだマツリの小さな手をユウリが握り直す。比較的歩きやすい川沿いの道を逸れて、草や木の生い茂る中に身を隠しながら少しずつ煙の見える方向へ向かって行った。

近付いて行くにつれて家全体の様子が見えるようになってきた。ようやく木々が開けた所まで出てくると、そこにあったのは薄汚れてはいるが白い石壁で出来た小さな家だった。さっきの煙はその家の屋根に繋がる煙突から上がっている。木製の板がはめ込まれたような簡素な窓が1つあるだけで入り口は見えない。おそらく此方は家の裏側のようなのだ。見た感じは普通の、普通の家だった。

「ねえ、お兄ちゃん……」

「……なんだよ」

「あれ、見て」

建物の方にはばかり視線を向けていたユウリはくいくいつと繋いだ手を引かれ、マツリの指差す先に視線を移してみた。家の裏でから舗装された道のような物が続き、その道の向かう先には木の柵で囲われた広い畑のようなものが広がっていた。確かに個人の畑を所有している家は町の方でもいくつもあったけど、こんなに広がってしかも綺麗に手入れされた畑は今までに見た事がなかった。

一体、どんな人が住んでるのだろう……

…その時、だ

『わんわんわんわんっ』

「「?!?!?」」

第1話 2

呆然と畑の方に意識を取られていた2人は、突然背後から聞こえた犬の鳴き声にビックリして草の茂みから飛び出した。そして同じように飛び出してきたのは、ふさふさとした綺麗な金色の毛に覆われた随分と大きな犬だった。首には何か布のような物が巻かれている。もしかしてこの家の人に飼われている犬かもしれない。

「マ、マツ！早く逃げ…、」

「こらー！」

「…！」

このままでは人が来る、そう考えたユウリがマツリの腕を引こうとしたその時。家の方から別の人の声が響いてきたのだ。

しかし、そこでユウリは違和感を覚えた。聞こえて来たその声は若い女の人の声だったのだ。訳の解らないユウリとマツリは未だ吼え続ける大きな犬を前にして逃げるところかオロオロすることしか出来なかった。

「こーら、^{アオイ}葵」

「……あ…」

「お客さんに吼えちゃダメっていつも言ってるでしょー」

…そこに現れたのは、思ったよりも若い女の子だった。淡い栗色の長い髪を右側で緩く1つに結んでいて、マツリよりも…おそらくユウリよりも幾つかは年上のようなのだがまだ大人とも言えないぐらいな年頃の少女。やはりあの犬の飼い主らしい。

「ごめんねービックリさせて」

「え…あ、いや」

「随分若い旅人さんだね。2人で来たのー？」

「や、旅人…って訳じゃ」

「あら？そうなんだ」

戸惑いながら受け答えるユウリを余所に、少女は犬をなだめながらまるで近所の知り合いとでも話すような軽い口ぶりだった。

「葵、もう少しでご飯だからあっち行っててねー。良い子だから」

大人しくなった犬（葵というらしい）によしよしと撫でながら話しかけると、葵はまるで返事をするかのように一声鳴いて。そして再び茂みの中へもぐって行った。

少女はその姿を満足げに見送ると視線を戻しユウリとマツリを見比べる。

「ご飯、食べた？」

「へ…？」

「朝ご飯、もう食べちゃった？」

「……いや」

「ちようど良かった！私も今からだから一緒に食べようよ」

「…良いの？」
「もちろんだよー」

不安げに問いかけたマツリに少女は緩く笑いかけ、優しくマツリの髪を撫でた。

するといとも簡単に警戒を解いたマツリはパアッと明るい表情を浮かべて隣りにいるユウリの顔を見上げる。

「良い人で良かったね、お兄ちゃん！」

「あ、やっぱり兄妹なんだ！似てる！」

「わたし茉吏っていうの。お姉ちゃんは？」

「お姉ちゃんは椿希^{ツバキ}って言います。よろしくねー」

ツバキちゃんツバキちゃん！とはしゃぐマツリはすっかり懐いてしまった様子だ。そんなマツリに対して全く口を出すことが出来なくなってしまったユウリは、困ったような表情を浮かべて妹の頭を撫でるその人物にジツと視線を送る。

するとその視線に気付いたツバキは苦笑いを浮かべた

「そんな顔しないでよ、変な人じゃないから」

「……………」

「お兄さんも良かったら名前教えてくれないかな」

「…悠吏」

戸惑いながらも、ヒトコトだけそう名前を告げたユウリに、ツバキはまた嬉しそうに笑ったのだった。

第2話

＊

囲炉裏を挟んで向き合うようにして座った小さな客人達は、ありあわせの食材で簡単につくられた質素な食事を、かけ込むように凄い勢いで口に運んでいた。

「（相当お腹減ってたのかな…）」

旅人では無いと本人達が否定していたので違うらしく、だとしたらこの兄妹2人だけでこのたびにはきつとそれ以上に何か深い事情があるのだろう。

ツバキは自分の食事も進めながらじつくりと2人を観察する。

若干赤色混じりな茶色の長い髪を頭のでっぺんでお団子にしている妹、マツリ。ちなみにさきほど年を聞いたところ『10歳くらい！』と元気よく曖昧な返事を返されてしまった。見た目からしてもまだ幼く、ちょうどそれぐらいの年齢ということで間違っではないだろう。

対する兄、ユウリは妹と同じ綺麗な赤茶色の髪を持ち風になびくほどの長さはある短髪だった。顔立ちはまだ子供らしさは抜け切れな

いながらもなかなか整った顔立ちをしていた。しかし妹と2人並んだこの様子を見ればやはりまだ子供らしかった。ちなみにこちら兄貴の年齢はといえば『たぶん16ぐらい』とやはり曖昧な回答だった。

「ツバキちゃんこれ美味しいね」

「ほんと？オカワリもあるよー」

「えっ、良いの？」

「もちろん！」

「マツ、オレのやるから辞めな」

ユウリは御椀を差し出そうとするマツリの腕を遮った。

「あれ、もしかしてお腹減ってなかった？それとも口に合わなかったとか…」

「そんなんじゃない、けど」

「だったら良いよ。多めに作ったから遠慮しないで」

気にしないように、と笑顔を浮かべながら再び彼女の方に手を差し出せば、マツリは兄の様子を気にしながらもゆっくり御椀を差し出した。

ユウリは何も言わなかったけどまだ何かを言いたそうな表情に見える

た。

しかしツバキは囲炉裏の真ん中で火にあぶられグツグツと煮える鍋から、祖母に教わった特製の山菜鍋を二掬い分ほど御椀によそってマツリに手渡す。

…すると、今度は受け取ったマツリまでもが何か浮かない顔をしていたので驚いた

「ゴメンナサイ…」

「え、っと…どうかした？」

「わたし達、あまり持っていないの」

「持っていない…って、何の話？」

「……おかね」

お金。

申し訳なさそうにそう呟いたマツリに、ツバキはチラと隣りの兄に視線を移してみれば同じような表情を浮かべていたので、おそらく彼も同じことを心配をしていたのだらう。

…どうやらまだツバキは2人から信用を得られたわけでは無かったらしい。

「お金なんて取るつもりないよ」

「え」

「当たり前でしょー！私がいきなり誘ったんだから」

まだ戸惑った様子の2人にツバキは苦笑いを浮かべた。

「わたし、小さい頃からお婆ちゃんここに住んでたんだ。それでお婆ちゃんが昔からよく山を越えてくる旅人さんにこうやってタダでご飯食べさせてあげたり布団貸してあげたりしてたの。お婆ちゃんとは2年前に死んじゃったけどね」

「それじゃ…アンタ今1人なの」

「そうだよー。けど最近訪ねて来てくれる旅人さんがすごく増えたからね。月に一回顔を見せに来てくれる人だっているくらいだし。今はその人達に畑で採れた野菜とか薬草とか買ってもらって生活してるーってわけ。」

だがそれでも寂しくないと言えは嘘になる。それにここへ遊びに来てくれる人達はみんなお婆ちゃんの知り合いだったり旅商人さんだったりするため、マツリやユウリのような年頃の近い子供と接する機会は全く無かったのだ。

だから2人の姿を見つけた時、自分を訪ねて来たわけでは無いにして何故だか放っておけずに声をかけてしまったのだ。

「だからさ。余計なお節介に巻き込まれたとでも思っで、ご飯食べさせてよ」

ね？と。今度は促すようにユウリの手にある中身の少なくなった御椀に向かって手を差し出した。

ユウリはツバキの顔と手を見比べるようにして少し考える仕草をした後、一気に御腕の中身を口の中にかけて込んで空にしてから照れくさそうにしながらもそれをツバキの手に押し付けたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7551f/>

エンゼルランプ

2011年1月4日03時56分発行